

一般論文

『OnBase 内部監査マネージャ』による内部統制監査の効率化 —導入実績と主要機能の紹介—

Efficiency Improvement of Internal Control Audit through "OnBase Internal Audit Manager"
- Introduction of the Implementation Record and Major Functions -

川島 圭*
Kei Kawashima

* システムソリューショングループ 第一システム事業部 OnBase ソリューション部

2008年4月の会計年度から適用された日本版SOX法（金融商品取引法）に対応し、企業の内部統制対策はいよいよ運用段階となった。内部統制の運用では、評価作業（内部監査）が重要であり、適切な実施は企業の大きな負担となる。

本稿では、内部統制の評価作業を効率化する「OnBase 内部監査マネージャ」について、効率化を支える主要機能と、導入実績をふまえた円滑な監査実施による負担の軽減、内部統制を活かした強い組織作りを紹介する。

Responding to the Japanese-equivalent of the U.S. Sarbanes-Oxley Act (Financial Instruments and Exchange Law), effective since April, which is the start of fiscal 2008, the internal control measures of enterprises moved into the implementation stage. Assessments (internal audits) are important in internal control operations, and a huge burden is placed on enterprises for their implementation.

Focusing on "OnBase Internal Audit Manager," which improves the efficiency of assessments in internal control, this paper introduces the major functions to support efficiency improvement, reduction of burden via smooth implementation of audits based on the implementation record, and the construction of a competitive organizational structure by taking advantage of internal controls.

1 まえがき

米国SOX法に端を発した金融商品取引法（日本版SOX法）が2008年4月から適用され、企業の内部統制対策はいよいよ運用段階となった。

PFUが提供する『OnBase 内部監査マネージャ』^{※1}は、米国SOX法対策で実績のあるHyland Software Inc.社（以後HSI）のソフトウェア『OnBase SOX Solution』をベースとして、日本市場向けにPFUが様々な独自機能を追加したものである。

内部統制対策はいくつかのフェーズに分かれており、文書化、内部監査、外部監査、報告、といった流れで進

んでいく。『OnBase 内部監査マネージャ』は、その核にあたる内部監査作業を支援し、効率化するものである。

本稿では、内部統制の評価作業を効率化する『OnBase 内部監査マネージャ』について、効率化を支える主要機能と、導入実績をふまえた円滑な監査実施による負担の軽減、内部統制を活かした強い組織作りを紹介する。

2 市場動向、背景

PFUが『OnBase 内部監査マネージャ』をもって日本版SOX法対応ソリューションの提供をはじめた

のは 2005 年末からである。しかし、2006 年までは「SOX 法とはいったい何なのか？」という手探り状態の企業がほとんどで、具体的な商談にまで発展するケースは少なく、商談化したとしても時期尚早ということで立ち消えになるものばかりだった。

様々な展示会において PFU は『OnBase 内部監査マネージャ』を紹介しており、話を聞きに来られるお客様はとて多く、反響も大きかった。しかしそれは、学習目的で立ち寄りのお客様が多いことの裏返しでもあった。すぐに自分たちに必要になるシステムだとは、なかなか認識してもらえなかった。

2006 年の末ごろから、その状況は一変する。多くの企業が、手探りの状態を脱し、日本版 SOX 法対応の具体策を求めるフェーズへと入ったのである。

それまでは、内部統制の文書化をするためのツールを求めているユーザーがほとんどだった。これから文書化をはじめめる企業に対して、その先に控える内部統制の評価作業（内部監査）はまだまだ切迫感を持っては受け止められなかった。

文書化作業が進展するにつれて、ようやくその先にあるものが見えてくる。文書化自体が内部統制の目的ではなく、それはあくまでも準備フェーズである。準備が進むにつれ、その運用フェーズである内部監査に注目が集まってきた。

3 導入における課題、実績

2007 年以降、『OnBase 内部監査マネージャ』は数多くの受注をいただいた。導入においては、短期間での導入と、内部監査の運用イメージを具体化するという課題があった。

次に、それぞれの課題を『OnBase 内部監査マネージャ』がどのように解決したのか説明する。

(1) 短期間での導入

文書化を含めた準備作業には長い時間がかかるため、その後のフェーズの取りかかりが遅れてしまうというケースが多い。しかし法施行の期限は決まっているため、対応時間は逼迫してしまう。

『OnBase 内部監査マネージャ』は米国で実績のあるパッケージソフトウェアをベースとしている。必要な機能はあらかじめモジュール化されているため、それを組み合わせることで個別のシステム開発よりもはるかに短期間での導入が可能となる。受注からプロトタイプ版の導入まで、おおよそ 1～2 ヶ月での導入実績がある。

それも、単にパッケージをそのまま提供するのではなく、顧客の要件を反映したうえでの導入である。

(2) 内部監査の運用イメージ

米国での対応実績がある企業をのぞいて、多くの企業にとって日本版 SOX 法対応の内部監査は未知の作業であり、どのようにしてそれを実施していけばいいのかというイメージを明確にするのは難しい。

そこで重要になるのは、動く画面を見てもらうこと、そして実際に動かしてもらうことである。

『OnBase 内部監査マネージャ』の大きなアドバンテージのひとつに、設定変更が容易なことが挙げられる。多くの場合パッケージソフトウェアは柔軟性に欠けるものだが、OnBase は柔軟性に富んでいる。

顧客の内部統制の定義を記述したリスクコントロールマトリックス (RCM) に沿った評価システムを、提案段階から構築してお客様に提示する。お客様はその画面を見て、実際に動かしてみることで、内部監査のイメージを具体化していくことができる。

システムの導入にあたっては、プロトタイプ版の導入、運用版の導入という二段階のステップを取るようにしている。初期の要件定義だけですべての運用イメージが明確になるということはまず無い。そのため、基本的な要件をヒアリングした段階でまずプロトタイプ版を導入し、お客様に評価をしてもらう。そしてよりお客様のイメージに合うシステムにしていくための検討を重ねギャップを埋めていくフィット&ギャップの作業を行う。そのうえで、運用版の導入に至る。

こうすることで、お客様の運用イメージを明確にしながら、それに沿ったシステムを構築していくことが可能となる。また、運用にあたっての注意点や、監査業務の実態など、お客様と共に学ぶことも非常に多い。互いの提案を積み重ね、より使い勝手のよいシステムを構築していくことができる。

4 主要機能の紹介

ここからは、『OnBase 内部監査マネージャ』の持つ主要機能について紹介していく。

そもそものポイントとして、『OnBase 内部監査マネージャ』を使って行う作業というのは、「内部監査の結果を記録する」ことである。しかし、単に記録するだけなら他のツールでも可能だし、紙で記録するというやり方も存在する。

このシステムがお客様にもたらすメリットというの

は、「記録できるようになる」ことではない。円滑な監査実施による負担の軽減と、内部統制を活かした強い組織作りをもたらすことが、このシステムを導入するメリットとなる。

それを実現する主要機能として、以下のものが挙げられる。

- 1) RCM / 検査計画の取込み
- 2) 証憑のサンプリングチェック
- 3) 帳票出力
- 4) 実施状況の管理/分析

次に、主要機能のそれぞれについて解説する。

(1) RCM / 検査計画の取込み

内部統制の文書化では、膨大な数の RCM 文書が発生する。RCM の中にはリスク、統制の内容が記述される。また、それとあわせて、正しく統制が取れているか確認するためにどのような検査をするのか、といった検査計画が記述されるケースも多い。

まさにこれが内部監査のベースとなる資料である。しかし、RCM を作ったからといって、すぐに内部監査が始められるわけではない。RCM の内容に沿って、その監査結果を記録していくための仕組みが必要となるのである。

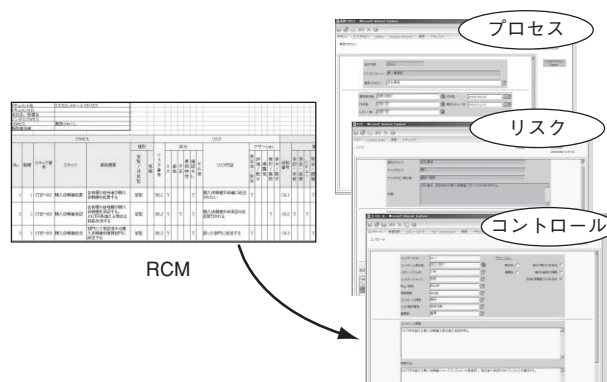
『OnBase 内部監査マネージャ』では、RCM / 検査計画の取込み機能を備えている。Microsoft^{注1)} Excel 形式の RCM 文書を読み込み、必要な情報を取り込む。それぞれ別々の文書として作成された複数の RCM がひとつのデータベースに集約され、体系的に管理されたものとなる。そして、リスクや統制、検査計画と紐付けた、内部監査の記録が行えるようになる。

操作はすべて Web ブラウザ経由で行うため、社内 LAN にアクセスできる環境であれば、特別なインストール作業などをすることなく利用できる (図-1 参照)。

また、OnBase の得意とする文書管理機能によって、RCM 文書そのものを管理することができる。文書化で作成した膨大な資料を OnBase で管理し、それをそのまま内部監査の仕組みに取り込むことで、文書化と内部監査というフェーズがつながり、一体化した枠組みで運用できる。

(2) 証憑のサンプリングチェック

内部監査のなかで最も負担の大きい作業としては、証憑のチェック作業が挙げられる。日々の業務の中で発



●図-1 RCM / 検査計画の取込み機能●
(Fig.1-RCM / inspection plan capturing function)

生する注文書や納品書といった証憑を定期的にチェックし、不備がないかを確認していく。事業所が多岐に渡る場合は、それぞれの場所に赴くだけでも時間がとられることになる。紙の証憑を探すのは労力がかかり、その作業の中で証憑を紛失してしまう可能性もある。また、その記録を残すために必要なコピー紙の量も膨大なものとなる。

PFU の得意とするスキャナと、OnBase の強みである文書管理機能を組み合わせることで、この負担を大きく軽減することができる。

日々発生する証憑は、スキャナで取り込み、OnBase に集約する。バーコードや OCR (光学文字認識) の機能と組み合わせれば、注文番号や金額といったキーワード情報を自動で取得できる。

そうやって電子化された文書は、紙で保管される文書と比べ大きなメリットがある。遠隔地にある事業所の証憑でも、自分の席で座ったままチェックすることができる。チェックした証憑をコピーする必要もなく、内部監査の結果と紐付けて容易に管理できる (図-2^{注2)} 参照)。

さらに、証憑のチェックを自動化することも可能で、企業の基幹システムと連携してサンプル情報を取得し、その証憑が登録されているかを自動的にチェックすることができる。

もちろん、最終的には人の目による確認が必要だが、既に一次チェックされた証憑が用意されているので、チェック作業の時間と負担が大幅に軽減される。特に、膨大な証憑をチェックする必要がある内部監査において

注1) Microsoft は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標である。

注2) 画面写真は Microsoft Corporation のガイドラインにしたがって使用している。

は、その違いが顕著となる。

(3) 帳票出力

電子化されたデータには大きなメリットがあるが、紙の資料が必要になるケースは依然として多い。それには、旧来の紙での運用を変えるのが難しいケースもあるし、会議での議論には紙のほうが便利だというケースもある。

帳票出力機能は、内部監査の記録を紙として出力する機能である。内部監査の報告書や正依頼書など、運用ルールで定められた形式にあわせ、システムに記録されたデータを再構成して出力する。Word や Excel といった形式で出力したものを、そのまま印刷してもいいし、レイアウト修正や追記をしてから印刷することも可能である (図-3参照)。

印刷した帳票を回覧し、押印やコメントなどが付記されたものを、再度スキャナから取り込むこともできる。承認済の帳票としてシステムに保管され、関係者は必要ときにすぐ取り出すことができる。紙に印刷して終わりというわけではなく、紙と電子データが相互に行き来した運用が可能である。

(4) 実施状況の管理/分析

内部監査は特定の部門だけで完結するようなものではなく、全社的な対応が必要となる。監査部門が中心となるのは当然だが、監査を受ける側の部門でも、日々の運用におけるチェック作業や証拠の収集が必要となってくる。

全社的に内部監査の実施状況を常に監視し、必要に応じて指示を出し、漏れや遅延なく内部監査を進めていくことが重要となる。

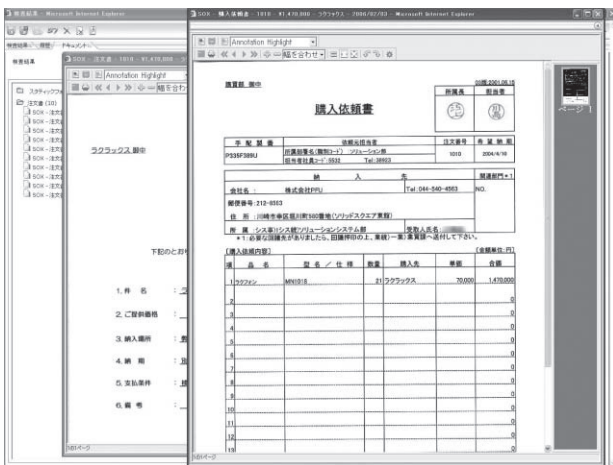
実施状況の管理/分析機能では、さまざまな視点で内部監査の実施状況を確認することができる。担当者ごとの進捗状況を確認したり、実施状況で集計したグラフを作ることもできる。担当者自身も、状況ごとのグラフから監査未実施の項目を開き、そこから内部監査の作業を開始することができる。部門ごとの評価結果を集計すれば、どの部門でより多くの問題が起こっているのかを把握することも可能だ (図-4参照)。

どのような視点で見たいか、というのはそれぞれの役割によって異なる。監査担当者であれば自分の担当分について状況を把握できればよいし、部門の管理者は部門全体の進捗状況を管理する必要があるだろう。そういった要望に応えるため、ユーザー権限によって見える情報を切替えられる機能が提供されている。また、ユーザー自身が自分の必要に応じてグラフを追加していくこともできる。

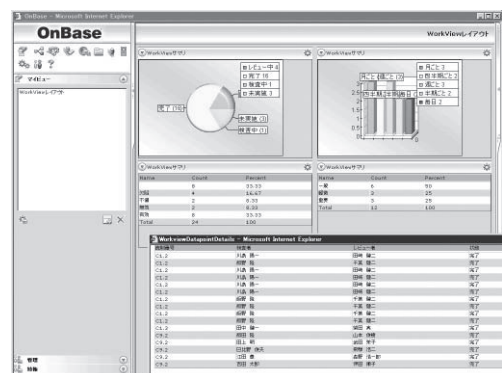
これにより、それぞれのユーザーが役割に応じて、必要な情報を即座に把握することが可能となる。



●図-3 検査報告書の出力例●
(Fig.3-Example of inspection report output)



●図-2 証拠の表示画面例●
(Fig.2-Example of the voucher display window)



●図-4 実施状況の管理/分析画面例●
(Fig.4-Example of the implementation progress management/analysis window)

5 むすび

内部統制は、その準備と運用の両面に渡って膨大な負担がかかる。いかに負担を軽減させるかというだけでなく、その仕組みを組織として定着させていくことも必要となる。いちど対応してしまえば終わりというわけではなく、継続的に続けていかねばならない義務だからだ。

『OnBase 内部監査マネージャ』はその負担を軽減し、本来の改善活動に注力できるので、内部統制を活か

した強い組織作りをもたらすことができる。それは、米国 SOX 法対応の実績に加え、日本での導入実績で多くの現場からの要求に応じてきた成果である。顧客に鍛えられてきたシステムが、本格的に内部統制を運用する顧客に、大きなメリットを生み出している。

参考文献

参1) 川島, 市川: 内部統制への取組み – OnBase 内部監査マネージャ, *PFU Tech. Rev.*, **17**, 1, pp.33-39 (2006).